

## 論文審査の結果の要旨

論文提出者氏名 尹 盛熙

尹盛熙氏の博士論文「韓国語の動詞性名詞に関する考察 ―動詞性名詞の意味と形式動詞の選択を中心に―」の審査結果について報告する。

本論文は、韓国語における動詞性名詞（動名詞）を取り上げ、動名詞に備わっている意味特性が動名詞の取る形式に影響を及ぼすことを、様々な現象を取り上げて論証しようとしたものである。韓国語の動名詞に関する従来の研究では、動名詞そのものよりも後続する形式動詞の分析に中心が置かれ、動名詞自体は名詞全般に関する議論の中でその一部類として扱われてきた。本論文では、動名詞群を議論の中心に据えることにより、関連する現象を動名詞側から読み解くというアプローチを試みている。また、同様な現象を持つ日本語の動名詞にも言及することにより、韓国語の動名詞に関して得られた分析結果がより普遍性を持つものであるかについて検証を行っている。

本論文は6章からなる。第I章では、本論文の目的とその意義について述べている。第II章では、韓国語の動名詞に関する先行研究を検証し、先行研究には「hata（する）」という形式動詞を中心に分析するものが多いこと、動名詞は独立したカテゴリーとして認められるよりは、名詞の下位範疇として位置づけられ分析されてきたことを指摘した。その上で、本論文では動名詞を中心として議論を進めるため、まず動名詞というカテゴリーを規定する作業から始め、形態的条件と意味的条件という基準から動名詞群の外延を明確にし、次章以降の議論の土台とした。

第III章では、韓国語の動名詞が受動の形式動詞「toyta（される・なる）」と結合する場合において、結合価の変化なしに別の形式動詞「hata（する）」と交替可能な場合があるという現象を取り上げた。まず、先行研究を概観することにより、ある種の状態変化を示す動名詞の場合、動名詞の主語名詞句が事態を引き起こしているかどうか、即ち主語名詞句のコントロール可能性という意味要素が形式動詞の選択に影響しているという指摘がなされていることを確認した。本論文では、その議論を深めるため、従来の研究が動名詞全体の意味を考察していたのに対し、動名詞を構成する漢語形態素にも注目した。その例として、「toyta」とのみ結合するとされている動名詞類と意味的な共通性を持つ、漢語形態素「phi（被）」を含む動名詞類（「phi+㉞」）を取り上げ、従来の指摘を検証している。その結果、「phi+㉞」類は、「V-サレル」という、語彙の意味を限定する漢語形態素「phi（被）」によって、形式動詞の選択が「toyta」に固定され、そのため「hata」とは結合せず、交替現象にも参加しないことが明らかになった。さらに、このような動名詞の例は日本語にはあまり見られず、語形成における韓国語との違いを示すものであることも、併せて指摘した。

第IV章では、動名詞と結合する「hata」と使役の形式動詞「sikhita（させる）」が結合価を変化させずに交替可能である現象を取り上げた。まずその現象に対する先行研究の分析を行い、より詳細なデータの記述を通しての検証が必要であることを指摘するとともに、様々な例の検証を行った。その結果、受動の形式動詞の場合同様、動名詞の表す意味特徴が大きく影響していることを明らかにした。さらに、「結果状態の実現」という点から、「toyta/hata/sikhita」という形式動詞全体における選択の傾向を統一的に説明できることを指摘した。加えて、本論文

の提案する分析の妥当性を示す証拠として、「pwul (不)」という漢語形態素を含む動名詞を取り上げ、その動名詞もまた、形式動詞の選択において、同一の基準が働いていることを示した。また、従来日本語で論じられてきた使役余剰という現象についても触れ、その現象にも韓国語の場合と似た意味基準が影響している可能性を示した。

さらに、以上の議論をもとに、韓国語の動名詞における形式動詞の選択及び交替現象を可能とするシステム上の装置として、「hata」の項構造が日本語の「する」とは異なり空ではないことを主張し、「hata」の項構造として外項のみを持つ構造を提案した。

第V章では、「NP-uyVN(NPのVN)」という形式を取り上げ、その形式の成立可能性と動名詞の意味の関係を分析した。動名詞がこの形式を取る条件として、従来の研究では動名詞のアスペクト性が指摘されているが、本論文では、それ以外にも、主体性や働きかけ性などといった、いくつかの意味特性が影響していることを指摘した。

第VI章では、これまでの考察を整理し、今後の課題を述べて結論とした。

本論文のもっとも大きな特徴は、韓国語の動名詞と形式動詞の関係を、動名詞の側から説明しようとした点にある。従来、動名詞に関する議論は動名詞そのものよりも形式動詞の機能に重点が置かれており、動名詞が形式動詞と結合するにおいて、どのような役割を果たしているかについては十分な検証がなされていない。本論文の考察によって、動名詞が持つ語彙の意味が、形式動詞との結合に大きな影響を与えていることをより明確に立証したことは大きな成果である。特に、従来の分析では、動名詞の語彙の意味だけに注目してきたが、動名詞を構成する漢語形態素が形式動詞との結合関係に影響を及ぼすことを指摘した点は、これまで十分説明できなかった問題点を解決できる可能性があり、動名詞と形式動詞の議論を大きく進めるものであると言える。また、本論文の議論から「toyta/hata/sikhita」という形式動詞全体について、統一的に説明できる選択条件を提示したことは、今後この問題の議論に新たな視点を示すことになるであろう。

このような点において、本論文は、韓国語学、韓国語教育の分野で高く評価される論文であるばかりでなく、日本語学や言語学の分野においても影響を与えうる業績であると考えられる。なお、審査において、形式動詞と関連する問題に限定され、動名詞全体の議論が不十分であること、漢語形態素に関する議論は、提示された例が少なく十分深められていないこと、新たな知見の提示方法が明確ではなく論旨がわかりにくいことなど、今後検討すべき課題も指摘されたが、それらが本論文の価値を損ねるほどのものではないことが確認された。

したがって、本審査委員会は本論文を博士（学術）の学位を授与するにふさわしいものと認定する。